

誰かがここに「居る」こと。

加納 土

幼い頃、僕の周りには名前も知らないたくさんのおとながいた。それは怪談の類ではなく、文字通り僕が住む家の中に20～30代の人たちがそこに「居た」のだ。幼い頃といっても、正確には1歳から8歳までの間、僕は「沈没家族」という不思議な名前の集まりの中にいた。時は90年代半ば。シングルマザーだった僕の母は、自分が仕事に行く間や自分の時間がほしい時に、代わりに僕の世話をしてくれる人を募集した。お金のやり取りはなし。それでも実際に母と僕が住んでいたアパートに人は集まり、母がいない間僕の世話をしてくれた。やがて、その集まりはアパートを飛び出し、複数の母子、シングルとの共同生活に移ったが、そこでも僕の周りには住人や遊びに来た人など常に誰かが居た。

保育人たちとはたくさん思い出がある。母に怒られた時に甘やかしてもらったこと、一緒にプラレールで遊んだこと、怒られたことなどなど。ただ、自分にとってなぜか記憶に強く残っているのが「保育」していない人のことだ。「沈没家族」には、ここに行けば誰かと交流できる、お酒が飲める、心が落ち着くといった動機でも人が来ていた。彼らは、幼い僕からするとただ、そこに「居る」妖怪のような存在だった。でも離れたところからみる彼らの話し声はとて心落ち着くものだったし、自分の一挙手一投足を酒の肴にしているのもなんだか嬉しかった。

子どもの存在を身近に感じられない環境でいつも生活をしている人にとって（それは今の僕もそう）、保育ということを考えるととてもハードルが高いように思う。そしてそれは、実際一筋縄ではいかないことなのだとも思う。でも「子どもを支えるおとなのまなざし」を考えたときに、「ただそこに居る」ということも一つのまなざしのように思う。「沈没家族」を始めた母は、もし人が集まっていなかったらと思うと怖いと話していた。ひとりの子どもと母にとっては、そこに誰かが居てくれたことで救われたのだ。

まずは肩肘張らず、ゆるっと。自分もぬらりひよんのようにそこに居ながらも温かく子どもと関わりたいと思う。



PROFILE

かのうつち：映画監督。1994年神奈川県生まれ。シングルマザーの母が自らの子どもを保育してくれる人を呼びかけて始まった共同保育の形「沈没家族」で1歳から8歳の間を過ごす。その後、武蔵大学社会学部の卒業制作として、自らの生い立ちをたどるドキュメンタリー映画『沈没家族』を制作。再編集した劇場版として2019年に全国で劇場公開する。また、2020年には筑摩書房より単著『沈没家族一子育て、無限大。』も出版された。